

## 従属節のタイプと「クレル」の解釈 - 補文のト節 ・コト節、付加詞節、関係節、裸ト節 -

著者	長谷川 信子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
号	26
ページ	13-24
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001766/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001766/</a>

# 従属節のタイプと「クレル」の解釈 — 補文のト節・コト節、付加詞節、関係節、裸ト節 —

長谷川 信子  
(神田外語大学)

## 要旨

従属節のタイプ分けは、通常、文中での認可や機能の観点から、大きく分けて、項か付加詞か、また、形態的な特徴により、ト節やコト節、様々な副詞節などが討議されてきている。本稿では、従属節内の省略された(空の)目的語の解釈と従属節内の話者主語「私が」とクレルの共起可能性から、従属節の構造を考察する。その観点からは、ト節(補文ト節、裸ト節)が他の従属節と大きく異なる振る舞いをすることを示し、ト節は主文とは独立した発話行為層(Speech Act Phrase; SaP)を持つこと、SaPの[+Speaker]素性が空の目的語の解釈に関わることなどを論じる。本稿は、筆者のHasegawa (1984/5)、長谷川 (2007)、Hasegawa (2018)でのゼロ代名詞やクレルの分析を、新たなデータを含めて発展させ考察するものである。

キーワード：Speech Act Phrase、省略、ゼロ代名詞、主題化、共感度

## 1. はじめに

日本語は、英語などに比べ、(1)に見られるように、主語や目的語といった文の必須要素(項)を、省略することが可能である。 $\phi$ は省略要素である。

- (1) a. {彼は /  $\phi$ } もう起きている。  
a'. {He / \* $\phi$ } has already been up.  
b. 花子が {それを /  $\phi$ } 買った。  
b'. Hanako bought {it / \* $\phi$ }.

省略は、一般的には、久野(1973, 1978, 1983)に代表されるように、談話や文脈から復元可能であることが条件とされている。<sup>1</sup>

これに対し、従属節内の目的語については、(2)や(3)のような例により、

現象はそれほど単純ではないことが、Kuroda（1965）により指摘されている。ここでのインデックスは、[i] は主節の主語（ここでは「太郎」）、[j] は談話内の「復元可能な要素」を指す。

- (2) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_{*ij}$  助けたと] 思っている。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_{ij}$  助けてクレタと] 思っている。
- (3) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_{ij}$  助けた時] 泣いていた。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_{ij}$  助けてクレタ時] 泣いていた。

(2) と (3) には従属節が埋め込まれているが、(2) は補文（目的節）で (3) は時の副詞節（付加詞の節）である。ここで観察される興味深い違いは、先ず、[7] (2a) と (3a) のインデックス [i]（太郎）の解釈の有無である。(2a) の [\*i] が示すように、補文の空の目的語は、主文の主語とは解釈できないが、副詞節内の目的語は主文の主語と解釈可能である。さらに興味深いことは、[1] (a) の例で観察された「補文の目的語」と「付加詞節の目的語」の [i] の読みの可能性の違いが、従属節内の述語に「クレル」を付与することで、中和化され、主文の主語の解釈が可能となることである。

こうしたKurodaの観察を受け、筆者はHasegawa（1984/5）で、(2a) と (3a) の違いを扱い、長谷川（2007）、Hasegawa（2018）で (2a) と (2b) の違いを考察した。本稿では、基本的にはそれらの分析を踏襲しつつ、それらでは考察が充分ではなかった現象を交え、省略と日本語の従属節の構造の関係をもう少し探してみたい。第2節では、Hasegawa（1984/5）、長谷川（2007）、Hasegawa（2018）を簡単に振り返り、[7] の現象を2.1で [1] の現象を2.2で扱い、関係する文構造、特に、ト節は発話行為層（Speech Act Phrase, SaP）を持つとの分析を提示する。第3節では、2.2のクレルとSaPの構造を受け、従属節内の主語を「話者」とした場合のクレルとの共起の可否を検討し、2.2節の分析をさらに補強する。第4節では、考察の対象を他の従属節、具体的には、コト補文節、関係節（連体修飾節）、条件節（副詞節）、および、裸ト節も加え、日本語の従属節目的語の省略現象から、従属節の構造が大きく2つのタイプに分けられること、それが、述語の形態（終止形が可能か否か）の違いと関係し、その違いは、文構造におけるSaPの有無であると論じる。第5節はまとめである。

## 2. 補文と付加詞節、クレルの構造

### 2.1 ト節と付加詞節の違い：Hasegawa (1984/5)

先ず、上記の [7] の現象、つまり、補文 (2a) と付加詞節 (3a) に見られる空の目的語 (省略された目的語) の解釈の違いである。補文 (2a) 中の空目的語は主節の主語の太郎 [i] とは解釈できないが、付加詞節内の空目的語にはその解釈が可能である。Hasegawa (1984/5) では、この違いを、省略 (空範疇) は、久野 (1973) の主題の省略に帰するとする分析を踏襲し、目的語要素の移動先の違いにより説明した。つまり、(2a) の補文の場合は目的語が主題の主語より上位の主題の位置まで移動し、そこで文脈上解釈可能な要素 ([j] の読み) と解釈されれば省略できるが、主題の位置は主節の主語位置より上位なので、主節の主語を照応することはできない。<sup>2</sup> 一方、付加詞節の目的語は主文の主題位置まで移動せず、付加詞節 (CP指定部) で止まる可能性があり、その位置より上位にある主節の主語 (太郎 [i]) へ照応することで、省略が可能となるのである。<sup>3</sup>

### 2.2 目的語の空範疇とクレル

このHasegawa (1984/5) の分析で説明ができないのが、(2b) の目的語の空範疇に許される [i] (主節の主語の「太郎」) の読みである。(2a) も (2b) も同じ補文なのにもかかわらず、どうして「クレル」の存在が、主文の主語の解釈を許すことになるのかが説明つかないのである。長谷川 (2007)、Hasegawa (2018) では、Hasegawa (1984/5) では解決できなかったこの問題を、クレルを目的語に特定の解釈を与える上位述語 (長谷川 (2007) ではphaseを形成するvP、Hasegawa (2018) では、Okura (2009) を援用しApplicative述語) として分析し、クレルの解釈素性が、主節の主語への言及を許すことで、(2b) の [i] の解釈を説明した。つまり、(2a) の補文も目的語は、主節の主題位置まで移動して [j] の解釈を受けるが、(2b) の目的語は、移動せずにクレルと関わることにより、クレルが志向する特定の読み (ここでは、主節の主語) の解釈を受けるのである。では、クレルが指定する特定の解釈とはどのようなものであろうか。

クレルはアゲルと対をなすが、その用法の違いは、久野 (1978) に詳しいが、話者の視点・共感度と関わる。

- (4) a. 太郎が花子に本を買って {アゲタ／クレタ}。  
 b. 私が花子に本を買って {アゲタ／\*クレタ}。  
 c. 太郎が私に本を買って {\*アゲタ／クレタ}。

「本を買う」という出来事の参画者に話者が含まれていない第3者だけの(4a)の場合は、アゲルを用いてもクレルを用いても、表現としては大差ないように感じられるが、出来事の参画者に話者が含まれると、(4b)と(4c)に見られる容認度に違いがでる。話者が行為者（主語）の場合はアゲル、行為の受け手（間接目的語）の場合はクレルを用いなければならないのである。このことから、アゲルとクレルの使用は、出来事に話者の（心理的）立ち位置・視点・共感度が反映され、アゲルの場合は話者の共感・視点は主語要素にあり（行為の恩恵が主語側から記述でき）、クレルの場合は、主語ではなく（間接）目的語にある（久野（1978））。このことから、一見中立的に思える（4a）でも、アゲルの場合は、話者の視点が主語の「太郎」側に、クレルの場合は行為の受け手の「花子」側にあることになる。

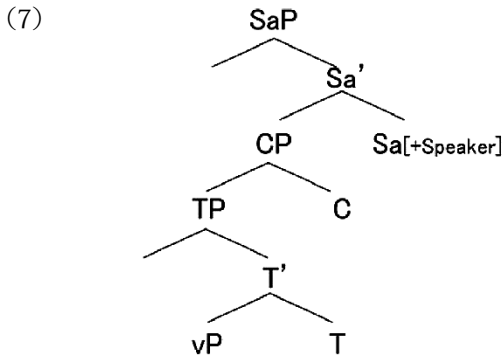
(4)の「本を買う」という行為の場合は、動作主の行為として記述するなら、間接目的語は不要で、「{太郎が／私が} 本を買った」のように、アゲル・クレルは必要ないし、話者の共感（その行為の恩恵）の向く先は明示しない表現が可能である。しかし、必須要素に明確に話者への恩恵や方向性が含まれるような場合、特に、その恩恵・方向が主語ではなく行為の受け手・対象（目的語、着点）となる話者 [k] の場合は、クレルの存在が省略要素の認可と関わる。<sup>4</sup>

- (5) a. 太郎が私<sub>k</sub>を {助けた／助けてクレタ}。  
 b. 太郎が私<sub>k</sub>に {電話した／電話してクレタ}。
- (6) a. 太郎が  $\phi_k$  {助けた／助けてクレタ}。  
 b. 太郎が  $\phi_k$  {電話した／電話してクレタ}。

(6)の例文は、(5)の目的語「私 {を／に}」を省略したものであり、省略要素 $\phi$ のインデックス [k] は話者である。その場合、クレルを用いなければ、非文法的である。この非文法性は、(1b)例「花子が {それを／ $\phi$ } を買った」

の目的語の省略とは同列には扱えない。(1b)の目的語の省略は、「それ」を主題化した「それは花子買った」を経て「それは」を「復元可能な要素」として省略されたと分析できるが、(5a)の目的語の「私」を、主題化した「\*私は太郎が助けた」は容認度が著しく低く、そこから「私は」を省略した「太郎が $\phi$ 助けた」からは、(5a)の読みは復元できない。しかし、クレルが用いられているのなら、「私を」の省略は可能なのである。

こうした事実から、長谷川(2007)では、一人称(話者)の省略は主題省略によるのではなく、クレルによる省略とし、クレルは、目的語の要素と一致し、クレルは節の最上部の談話・発話行為と関わるSaPの素性(話者 [+Speaker] 素性)と同定されることにより、空の目的語が話者と解釈されると分析した。想定する文構造は、(7)である。<sup>5</sup>



このSaPの構造とクレルの分析が、(2b)の補文の空の目的語の解釈と関係する。ただ、(2b)は(6)と異なり補文であるから、(7)の構造は補文の構造となる。補文における [+Speaker] 素性は、談話全体の話者ではなく、ト節を生み出す主体、(2b)では「思う」の主語の「太郎」、ということになり、クレルが用いられるなら、空の目的語は主節の主語の解釈が可能となるのである。

### 3. クレルの解釈

2.2節では(2b)のト節の補文が(7)のSaP構造を持ち、空の目的語を同定するクレルが、SaPの [+Speaker] 素性と連動し、それが主節の主語を示す

ことから、空の目的語の解釈が可能になることを見た。同様の分析が付加詞節の(3b)でも可能と思われるが、(2b)(3b)（ここでは、[i]の解釈のみを考察の対象とし(8a, b)として再録)を(9)と比較し、目的語の空範疇とクレル、補文のタイプの関係をさらに考察する。

- (8) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けてクレタと] 思っている。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けてクレタ時] 泣いていた。
- (9) a. 太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けてクレタと] 思っている。  
 b. \*太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けてクレタ時] 泣いていた。

(8)では、補文の(a)でも付加詞節の(b)でも空の目的語は主節の主語と解釈される。さて、(9)は(8)の従属節の主語「花子」を話者の「私」に変更した例であるが、文法性に明確な違いがある。補文の(9a)は文法的であるが、付加詞節の(9b)では非文となる。ちなみに、(9b)はクレタが使われないなら、(10b)から分かるように文法的である。

- (10) a. \*太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けたと] 思っている。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けた時] 泣いていた。

そして、文法的な(10b)に対し、補文の場合は、(8a)のようにクレタを使わなければ、(2a)同様、空の目的語に主節の主語の解釈は許されない。

ここでの観察をまとめると、補文においてはクレルの存在が空の目的語の解釈を主節主語と結びつける重要な役割を果たし、補文の主語に話者の「私」がくるか否かは文法性(非文法性)に影響を与えない。しかし、付加詞節においては、クレルの有無は文法性に影響しないが、話者「私」が従属節の主語となりクレルと共起することは許されない。この「話者主語がクレルと共起できない」という事実は、(4b)の単文でのクレルの生起と同じであり、その点では、むしろ補文の(9a)がその条件を無視していることになる。つまり、付加詞節は単文(主節)同様、クレルの「話者」指向性が明確に発揮されるが、補文における「話者」指向性は、文全体の「話者」ではなく、補文を取る述語(こ

ここでは「思う」の主語を指向しており、補文の主語の「私」は、補文中では「花子」同様、主文の主語の観点からは第3者となり、「話者」としては振る舞っていないのである。言い換えれば、付加詞節は、クレルの「話者指向性」は、談話の「話者」（以下、「絶対的話者」）に直接関わるが、補文のクレルにとっての「話者指向性」はその補文を認可するすぐ上位節の主語（以下「相対的話者」）に向けられており、そこでは「絶対的話者」は、「相対的話者」以外の要素同様、クレルの解釈には関与しないのである。

この補文と付加詞節の違いは、従属節のCPにSaPが生起できるか否かの違い、つまり、補文にはSaPがあるが、付加詞節にはSaPはない、との違いに帰すると考えれば、クレルの解釈は、最も近いSaPの [+Speaker] 素性により同定されると分析できる。このように考えれば、[+Speaker] 素性の指向する「話者」は、SaPの上位の「話者」で、補文の場合は主文の主語となることから「相対的話者」を、従属節の場合は、それ自身が（他の補文内に含まれていない限り）、主文の上位の「絶対的話者」となる。結果として、付加詞節内では、「私」（絶対的話者）は、クレル節の主語とはなり得ないのである。

ここで、注意しておきたいのは、「話者指向性」とは、「話者との同定」ということではなく、話者の共感・視点階層と矛盾しない要素との同定と考える必要がある点である。つまり、上記で、クレルが認可する目的語がSaPの [+Speaker] により同定されると述べたが、この素性が示すのは、「話者」の視点、共感度であり、それは、「話者」への同定の可能性だけでなく、出来事の参画者の中で話者の視点と矛盾しない要素の解釈を許す。例えば、(8b)なら、クレルと関わるSaPは文全体（主節）のものだが、クレルが認可する空の目的語の解釈は、「絶対話者」の可能性もあるし、「話者」の共感度階層と矛盾しない主節の主語（太郎）の可能性もある。ここで、重要なのは、従属節の(8b)において、クレルが指向する「話者」は「絶対話者」であり、クレルが示す恩恵は、話者に対しての可能性も、話者が共感を持つ「太郎」に対しての可能性もあるが、補文(8a)のクレルは、補文のSaPにより同定される「相対的話者」であるから、「助ける」行為の恩恵の向く先は、主文の主語の「太郎」であり、絶対話者の「私」にはない点である。同じクレルでも、共感の向く先の解釈に違いがあるのである。



#### 4. 従属節のタイプとクレル

ここまでは、補文としてト節、付加詞節として「時」の副詞節を例に、従属節にはSaPの有無がクレルの解釈と関わることを見た。この違いは、果たして、補文と付加詞節の違いなのか、それとも、他の要因が関係しているのだろうか、この疑問に答えるために、異なるタイプの節を(11)～(14)で検討してみよう。(11)は補文だが、ト節ではなくコト節である。(12)は条件節、(13)は関係節。そして、(14)は、裸ト節 (Bare Quotative、裸引用節) (Yamada (2019)、Tomiooka (2019) 参照) の例である。ここで考察の対象とするのは、上記同様、空の目的語が、主節の主語の解釈がクレルの有無で異なるか否か、また、従属節の主語に「私」を用いた場合、クレルとの共起を許す(即ち、「相対的話者」の指向性を持つ)か否かである。

- (11) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けたことを] 覚えている。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けクレタことを] 覚えている。  
 c. \*太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けクレタことを] 覚えている。
- (12) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けるなら] 試験に受かるだろう。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けてクレルなら] 試験に受かるだろう。  
 c. \*太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けてクレルなら] 試験に受かるだろう。
- (13) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けた] 場所を知らない。<sup>6</sup>  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けてクレタ] 場所を知らない。  
 c. \*太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けてクレタ] 場所を知らない。
- (14) a. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けると] 大量の仕事を引き受けた。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は [花子が  $\phi_i$  助けてクレルと] 大量の仕事を引き受けた。  
 c. 太郎<sub>i</sub>は [私が  $\phi_i$  助けてクレルと] 大量の仕事を引き受けた。

先ず、明確な文法性の違いが観察される (c) の例、補文の主語「私」とクレルの共起の可能性、から考察しよう。(11)～(13)では、クレルと「私」主語は共起できないが、(14)の裸ト節では可能である。これは、裸ト節には、

補文のト節同様、独立したSaPがあり、その [+Speaker] 素性が「相対的な話者」として上位文の「太郎」を指向することから、主語の「私」の視点は無視されると考えれば説明がつく。それに対し、(11)～(13)の例での「私」を主語としてクレルを用いることができない状況は、上記の「時」の付加詞節と同様で、これらの従属節にはSaPがなく、結果として、これらの節内のクレルは「絶対的な話者」(主文のSaPの [+Speaker])を指向することを示している。

(11)の従属節はコトに導かれた補文であるが、ト節補文と異なり、SaPを持たないのである。また、(14)の裸ト節は、主文の述語「(大量の仕事を)引き受けた」の項ではなく、意味的には、「～と {思っ／言っ}」といった思考・発言の付帯状況を示す副詞的(付加詞的)な要素である(意味的な考察についてはYamada (2019)、Tomioaka (2019)を参照)。つまり、従属節がSaPを持つか否かは、補文か否かではなく、ト節か否かと関係し、その違いは、述語の形態とも関わり、終止形か可能か否かによると考えられそうである。SaPはその時制辞句(TP)に終止形を許し、SaPの [+Speaker] が上位の [+Speaker] 要素の解釈を受けることから、従属節のSaPは「相対的な話者」を、最上位(主節)のSaPは「絶対的な話者」を指向するのである。

クレルを伴わない空の目的語((a)の例)は、空のオペレータ移動により解釈される。最上位の「主題」まで移動できる補文((11a)のコト補文)では、「談話・文脈の復元可能な要素」として解釈される。この場合は、注3で述べたように、主節の主語の解釈はない。よって、クレルの有無が空の目的語の解釈可能性と大きく関わる。しかし、オペレータの移動が付加詞節のCP指定部で止まる従属節(「時」の節(3a, b)、条件節(12a, b))の場合は、従属節の上位の名詞句(つまり、主節の主語)に照応が可能なことから、同定のプロセスは異なるが、クレルの有無は、空の目的語の解釈には影響を与えないのである。

上記の説明で、微妙なのが(14)の裸ト節である。意味・機能的には、上述したように、裸ト節は項ではなく付加詞である。付加詞であるなら、目的語からの移動は、付加詞節内に止まり、他の従属節同様、主節の主語と解釈されることが可能な筈であるが、(14a)の [i] の解釈は、補文ト節の場合と同様で容認度が低い。このように、裸ト節は、空の目的語の解釈も、SaPの有無(クレルと「私」主語の共起)も補文のト節と同様である。

さらに、以下の現象でも、裸ト節と補文ト節の振る舞いは酷似している。以下では (a) が補文のト節、(b) が裸ト節である。

(15) a. 父は [早く来いと] 命令した。

b. 父は [早く来いと] 手招きした。

(16) a. 花子は [バスがいつ来るかと] 尋ねた。

b. 花子は [バスがいつ来るかと] 時計を見た。

(17) a. 太郎は [どの大学に留学しようと] 思っているの。

b. 太郎は [どの大学に留学しようと] お金を貯めているの？

どちらのト節にも、命令形や疑問文を含むことができ、ト節内の疑問詞要素は主節の作用域を持つ疑問文となることができる。<sup>7</sup> 主節の述語の「項」であるか否かを除けば、裸ト節は、(2) (8a) (9a) (14) などの振る舞いからも、形態的にも、統語的にも、「項」としての振る舞いと相違は観察されない。

## 5. まとめ

従属節のタイプは、通常、文中での機能や認可の違いなどにより、補文か付加詞か、関係節か、また、文末要素の違いなどの形態的な特徴から考察されるが、本稿では、空の目的語の解釈の違い、クレルが生起する場合の解釈の変化の観点から異なる従属節の振る舞いを扱った。明確な違いは、ト節か否か、であり、それは述語の形態の観点からは終止形が許されるか否かであり、その違いは節が構造的に発話行為と関わる層 (SaP) を持つか否かと分析できることを示した。その違いは、これまでの統語構造では重要な違いとされてきた補文と付加詞の境界とは異なるもので、本稿で考察した現象が重要な統語現象である限り、従属節のSaPの有無を導き出す体系が項か付加詞かの違いとは別に求められることを示している。それぞれがどのような体系かについては、今後の課題とする。

## 注

- 1 「復元可能な要素」の定義は簡単ではないが、談話や文脈で、話し手と聞き手（書き手と読み手）が共有情報として了解している要素、当該の会話や文脈で登録済みの要素とされている。そうした要素は、「主題」の機能として、ハ格を伴うことから、「主題の省略」が(1)の現象の説明とされてきている。詳しくは久野（1973, 1978, 1983）を参照のこと。本論文でも、(1)の省略については、この「主題省略」を踏襲するが、本稿の中心課題は、(2) (3)を含め、従属節内の目的語の省略現象である。
- 2 これは、原理とパラメータ理論の束縛理論の痕跡（目的語の位置の空範疇）に課せられた束縛条件C（非項の位置（主題位置）への移動の痕跡は、項（主文の主語位置）からの局所的束縛を受けてはならない）による。詳しくは、Hasegawa（1984/5）を参照のこと。
- 3 詳細はHasegawa（1984/5）を参照されたいが、空範疇はオペレータとしてのPROの移動によるとし、PROの移動先は、統率されない非項の位置（付加詞節のCP指定部や主節の主題位置）で、補文のCP指定部は述語により統率されているため、PROオペレータはそこに止まることができず、主文のCP指定部（主題位置）まで、移動することになる。
- 4 方向性が関わる（5b）の場合は、クレタの変わりにキタを用いて「太郎が {私に/φ} 電話してキタ」も可能である。本稿では、キタと空要素の解釈は扱わない。
- 5 長谷川（2007）では、クレルを同定する節の層（句）をモダリティ句（ModP）としたが、Hasegawa（2018）では、Speas and Tenny（2003）を援用しSpeech Act Phrase（SaP）とした。本稿でもSaPを用いる。
- 6 関係節中の目的語の空範疇が関係節の主名詞を指さない場合、クレルにより同定されない（13a）では、主題化による解釈の可能性は、許されない。これは、付加詞節と異なり、関係節には主名詞と関わるオペレータと目的語の移動先が競合するためである。しかし、クレルにより同定されるなら、（13b）のように主節の主語（話者の共感の向く先）と解釈できる。
- 7 こうした裸ト節の振る舞いなどから、Tomioaka（2019）も裸ト節を埋め込まれた発話行為節（Embedded Speech Act）としており、本稿の主張と重なる。ただ、本稿では、上述したように、補文のト節の振る舞い、特に、空目的語とクレルの解釈、から主文のSaPとは別にト節がSaPを持つことを論じ、裸ト節の振る舞いが、補文ト節と同じことから、同様にSaPを持つ節であることを論じた。

## 参考文献

- Hasegawa, Nobuko (1984/5) On the so-called zero-pronouns in Japanese, *The Linguistic Review* 4: 289-342.
- 長谷川信子（2007）「1人称の省略：モダリティとクレル」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』pp. 331-369. ひつじ書房

- Hasegawa, Nobuko (2018) "Benefactives," In Yoko Hasegawa ed., *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*. 509-529. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 東京：大修館書店
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京：大修館書店
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』 東京：大修館書店
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Okura, Naoko (2009) *Applicative and little verbs: In view of possessor raising and benefactive constructions*. Ph.D. dissertation, Kanda University of International Studies.
- Speas, Peggy and Carol Tenny (2003) Configurational properties of point of view roles. In Anna Maria Di Sciullo ed., *Assymetory in grammar*, 315-344, Amsterdam: John Benjamins.
- Tomioka, Satoshi (2019) Bare quotatives as embedded speech acts, 『日本言語学会第185回大会予稿集』 288-294.
- Yamada, Akitaka (2019) Embedded moods in Japanese, 『日本言語学会第185回大会予稿集』 267-273.